

氏名(本籍)	呂 莉(中国)
学位の種類	文学博士
学位記番号	博甲第604号
学位授与年月日	平成元年3月25日
学位授与の要件	学位規則第5条第1項該当
審査研究科	文芸・言語研究科
学位論文題目	萬葉集と中国文学 —柿本人麻呂を通して—
主査	筑波大学教授 文学博士 伊藤 博
副査	筑波大学教授 桑原 博史
副査	筑波大学教授 奥野 純一
副査	筑波大学教授 文学博士 内山 知也
副査	筑波大学助教授 向嶋 成美

論 文 の 要 旨

本論文は、萬葉歌人柿本人麻呂における中国文学受容の実態を追究することを通して、人麻呂が古代和歌史の上で何を成し遂げ、いかなる位置を占めるかを考察する点に目的を置く。その組織は次の通り。

序章 柿本人麻呂の中国文学

第1章 漢語表記における表現意図（3節）

第2章 詩語に由来する歌語（3節）

第3章 漢詩に基づく歌の表現（2節）

結章 人麻呂における伝統と創造

序章では、本論文の直接の対象が、(1)人麻呂作歌（約87首）と(2)人麻呂集歌（約260首）とにあることを述べ、(2)には略体表記の歌（助字などを概ね略して記した歌）と非略体表記の歌（助字などを比較的丁寧記した歌）とがあることを先学の考察に従って説いた上で、人麻呂に関するこれらの作品が中国文学との関係でいかに扱われてきたかを論じ、従来の研究がいまだ核心には至っていないことを明らかにしている。

第1章では、人麻呂の和歌表記と中国文学との関わりを通して、人麻呂が表現の上に幾多の新生面を開いたことを論ずる。すなわち、第1節では、「樛木乃弥継嗣爾」（巻1-29）と「白浪散動」（巻2-220）を取りあげ、「樛木」と「継嗣」との取り合せは詩経等の語を直接踏まえた表記、「散

動」は詩賦に多用される「波動」「浪動」「波散」等を応用した表記で、共に視覚をも計算して深い意味を定着させたものと説く。第2節では、漠然たる和語に漢語の持つ明確な意味を賦与した例として、「天伝来白雪」（巻3-261）と「家門当見由」（巻3-255）を取りあげ、ユキに「白雪」、イへに「家門」の漢語を宛てた創意工夫を明らかにしている。第3節では、作歌・略体歌・非略体歌に、意味の重複する熟字表記が共通して目立つことを指摘、それら人麻呂関係歌においてはじめて用いられた例として、迷惑・禱祈・安定・奉仕・遣使・軍士・猶預不定・霏霏・衣服・惻隱・伺候・装束・散動・鬱悒・須臾・髣髴・往来・侍従などがあることを述べ、漢詩文にかかわるかくも多彩な表記を用いた歌人は他にないことを明らかにしつつ、これによれば、人麻呂関係歌はすべて人麻呂自身の表記と見られるとしている。

第2章は、人麻呂関係歌に見られる詩語に由来する歌語には、伝統的な修辞形式（序詞）の中に用いられているものが目立つことを指摘してその表現性を論じた上で、古い形の中に新しい発想を導入することによって切り開かれた人麻呂の表現の独創性について論ずる。すなわち、第1節では「雲間」（作歌・非略体歌）、第2節では「友罵」（略体歌）、第3節では「為垂柳」「春楊」（略体歌）を対象としつつ、それらが、いずれも人麻呂によって中国文学からはじめて和歌に取り入れられたものであり、かつ、それを継承した後の歌人たちとは一線を画する独自性が存することを論じている。なお、第2節では、「友罵」の語を含む歌を冒頭とする四首（巻10-1890～3）を一連の作であると論じ、それが持統朝以後の詠と見られると考証することによって、略体歌をすべて天武9年までのものと限定する説に疑問を投じている。

第3章は、歌の内容や形態に摂取された漢詩の表現や手法を通して人麻呂の新生面を探る。すなわち、第1節では、非略体歌「子松末由沫雪流」（巻10-2314）における「雪流」が六朝詠物詩に多く用いられる「流雪」「流霞」などに基づくきわめて斬新な表現であることを究明、他に「夕星」「霏霏」「木葉凌」等、六朝詩に導かれた語をも例証に引きながら、人麻呂が萬葉詠物歌において新しい境地を拓いたことを綿密に論じている。第2節では、軽皇子安騎野遊獵時の歌（巻1-45～9）が「長歌」と「短歌」の対比構造を持つ最初の歌群であること、その短歌四首中の一首「東野炎立所見而反見為者月西渡」（48）が「東野↔西空」「炎(日)立↔月渡」の対比を持つこと、六朝詩に月や日について「西流」「西傾」「西帰」「西匿」「西馳」等の表現が夥しいこと等を明し、人麻呂の対比表現が日本古来の繰返し詠法の中に漢詩の手法を持ちこむことによって開化したものと論じ、短歌48の訓としては、ヒムガシノノニハカギロヒタツミエテカヘリミスレバツキニシワタルが穏当ではないかと述べている。

結章では、以上の論の帰結するところをまとめている。その要点は次の四つ。

- (1) 人麻呂は、表記・表現・作歌形式等、さまざまな面で中国文学と深く関わっており、そのことによって、和歌の表現力を大いに高め豊かにした。萬葉初期の歌謡性の濃い歌から精練された歌への完成は、中国文学をよく学んだ人麻呂の力量によるところが大きい。
- (2) しかし、人麻呂の中国文学の受容は、他の萬葉歌人と違って、常に和歌の伝統の発想や表現に根ざしつつ、それを拡充し昇華する形で進められた。そこには国語や和歌に対する人麻呂の確かな

- 意識が見られ、人麻呂こそ真の形で中国文学を受けとめた典型的な日本人であったと考えられる。
- (3) 一方、表記の面でも、和歌記載の方法はほとんど人麻呂一人によって完成されたと見てよく、人麻呂の作品は人々の耳に訴えるために詠まれただけでなく、目を通して読まれることをも目的として作られたと見られる。
- (4) 中国文学との関係から見て、人麻呂とやや縁が薄いとされがちな略体歌も、作歌・非略体歌と同様、人麻呂によって記されたもので、その中には人麻呂自身の作も少なからず含まれていることが明らかになる。

審 査 の 要 旨

柿本人麻呂は萬葉歌人中の第一人者である。よって、人麻呂を対象とする考察は古来すこぶる多く、枚挙にいとまがない。しかし、人麻呂は、前代の記紀歌謡や初期萬葉等との関連で新しさを説かれることはあっても、中国文学との関わりにおいて深く論ぜられることは少なかった。その関わりが説かれる場合でも、人麻呂における中国文学の素養は耳を通しての面が多いと考えられがちであった。むろん昭和30年頃から、人麻呂の表現に漢籍を解した形跡のあることが小島憲之氏によって指摘されはじめ、近時は、稲岡耕二・渡瀬昌忠氏等によって、とくにその歌集の歌と中国文学との関連が具体的に論ぜられるようになった。けれども、それらの考察も緒についたばかりで、人麻呂関係歌全体について体系化されてはいない。

本論文は、このありようにあるいは疑問を抱き、あるいは啓発されることによって、表記・表現・作歌形式等多様な面から、人麻呂における中国文学受容の様相を論じ、人麻呂作品の和歌史上の意義について新しい光を投げようとした。本論文の特色はこの一点に認められ、見てきた通りの着実にして斬新な考察は、人麻呂研究において時期を画するものと評価することができる。

前項では一々紹介できなかつたけれども、初唐頃までの中国文献を博搜して、的確に人麻呂の表現と比較検討しているのは注目し得る。また、その着目したところが、「継嗣」「散動」「白雪」「家門」「雲間」「雪流」「友罵」「楊柳」「月西渡」等々、格別目に立つ表記ではないために、従来ほとんど無視されてきた語であり、さような語の表現性を通して人麻呂の本質に切り込んだ点は、比較文学研究のありかたに一石を通ずるところがあると言えよう。

ただし、中国文献学には精度の高い研究史がある。欲を言えば、本論文にはその研究史へのよりこまやかな配慮が望まれる。しかし、この点は、本論文が自ら残した課題、略体歌における自他作の弁別や作歌・略体歌・非略体歌の関連に対する、さらに具体的な考察ともども、今後の研鑽にまつべきであろう。本論文は学位論文として高い水準に達しており、その目的と方法が持続されるならば、柿本人麻呂研究の上に大きな足跡を残すことは疑いないと考えられる。

よって、著者は文学博士の学位を受ける資格があるものと認める。